

喫茶店から始まる 地域振興の輪

人・まちとつながる

敷島珈琲店 店長 町野洋亮^{ようすけ}さん 町野美咲^{みさき}さん



JR岐阜駅から西へ歩いて約20分の敷島町に、元岐阜県職員の町野さん夫婦が営む「敷島珈琲店」があります。公務員から喫茶店の店主へと転身した想いや、オープン7年目を迎えた今、そしてこれからについて伺いました。

岐阜の産業振興に携わって

前職で陶磁器や和紙、刃物など地場産業振興の業務に携わっていた町野さん。イベントや催事を通じて企業支援に励むなかで、いつしか企業の経営活動にトータルで関わりたいと考えるようになりました。「商品や事業の一部の手伝いで終わるのでなく、自分で最初から最後までやってみたいという思いが膨らみました」

人との出会い・転機

「東京の大企業で広報として活躍していた人が隣の課に来てから、戦術、戦略、プロモーションという、今まで職場で聞いたことのないワードが聞こえてくるようになりました」興味を持った町野さんは、志願してその人の下につきました。民間の風は、職員自らが製品を手以外へと仕掛けていく、攻めの姿勢を生んだといいます。

家族の協力がチカラに

町野さんの父は、高速道路サービシアアのテナントを指導する仕事をしていて、事業計画に的確なアドバイスをくれました。修正を繰り返して「よし、これなら行けるんじゃないか」この父の言葉が後押しとなりました。「退職し本格的に走り出しました。僕自身は不安はなかった。計画をひとつずつ実行し、必要なら都度修正する。ステップを踏んでいくだけです」飄々としたさまは、行政での経験を感じさせます。

一方、妻の美咲さんはアメリカへの大学留学で培った経験と語学力を生かし、世界各国で展開する岐阜県へのインバウンド誘客の仕事に携わっていました。「まちづくりや地域支援に関わりたくて県職員になったので、喫茶店という形で地域のコミュニティ作りがしたいという彼の想いは、目指すところは同じだと思いました。」と振り返ります。

モノの消費サイクルが早い現代、流行に左右されず10年、20年続けられるものを、と「ホットケーキ」を看板メニューに決め、レシビは美咲さんがアメリカで食べた思い出のパンケーキをベースに、ニューヨークの有名店の洋書をヒントに完成させました。他にも、美咲さんが出張先の国々で食べた現地の味は店のメニューに盛り込まれ、これまでの経験がお店で生きています。

ひと・まちと繋がって

敷島珈琲店は、社会・地域・人との繋がりを、との想いで、壁面を地域の方の絵画や写真の作品展に無料で開放しています。定期的に入れ替わ



壁を彩る展示作品

ある百貨店の催事でメーカーに代わり接客をした際、最終日に百貨店側から「よく頑張っていましたね」と労いの言葉をかけられました。「それまでは立っているだけに近かったのですが、必死で売り込んだんです。後でわかったのですが、お客様だと思っていた人がその百貨店の社長さんだったんです」店員のように上手くなくても、熱意は伝わる。ものやサービスを扱う楽しさを知り、経営への興味が高まりました。

喫茶店というコミュニティ文化

経営の経験もスキルもない自分に来ることを、と考えた末「喫茶店」が浮かびました。町野さんは岐阜市で生まれ、父親の仕事の都合で小学校から高校まで横浜や東京で過ごしました。上司に連れられ出勤前に喫茶店でモーニングを食べたり、大切な商談を喫茶店でおこなったりと、大人になって知ったこの地方独特の喫茶店のあり方を「面白くて大切な地域文化」と感じていました。

「地域の人が気軽に集う喫茶店を作りたい」当時30代半ばの働き盛り。周囲の反対は少なくありませんでした。「公務員に経営ができるわけがない」という声も聞こえて、じゃあやってみようかと発奮しました」

る作品を鑑賞しながらコーヒーを楽しむのも醍醐味。また、日本のものづくりを応援しよう、と「これは本当に良い」と思う全国の産品を厳選し店頭販売しています。



全国の逸品を集めた物販コーナー

今でも県職時代にお付き合いのあったメーカーの方が関や高山など県内各地から来店してくれるといい「ありがたいですね。自分のしてきた事が評価していただけていたんだなと」

3年前には、JR岐阜駅アクティブGに2号店をオープンしました。居抜きで入った店舗には立派なオープンがあり、美咲さん自らパン作りに挑戦しています。JAとのコラボで、美濃いび茶あんぱんや柿のデニッシュ、といった、地元食材を使ったパンが誕生したのも、やはり前職からのご縁があったとのこと。

「人や地域に助けてもらっています。何をするにも、地域貢献や農業振興など、社会的な意義があるかを考えたい」

これからの夢

業態にこだわらず、社会に役立つ事業をしていきたいという二人は、障がいのある人が作る商品の販売や、若者の職業的自立を支援する県の就労支援事業の受け入れ先として雇用にも乗り出しています。

「仕事に繋がらそうな話題を見つけては、主人とああでもない、こうでもない毎日のように盛り上がっています。たまにぶつかることもあるけれど、想いは同じです」

夫婦二人三脚で作る「地域コミュニティ」は、喫茶店の小さなスペースを超え、もっと大きな輪へと広がっています。